

景色 伊藤桂一





© K. Ito 1984

水の景色

一九八四年九月二五日第一刷発行

定価一四〇〇円

著者 伊藤桂一

編集者 藤野邦康

発行者 平野明久

発行所 株式会社構想社

東京都文京区小石川五ノ一九ノ二五

〒二二 電話 (03) 447-1000

振替口座 (東京) 一五五七二

印刷所 新陽印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替えいたします)

ISBN 4-87574-039-5

短編名作選『水の景色』目次

溯	日	猫	母	帰
り	々	の	の	
鮎	好	上	上	
	日	京	京	郷
107	85	59	29	7

雀の国 135

日々寂日 163

源流へ 191

孤独の源流 勝又浩 253

著者あとがき 269

裝
幀

山
高
登

短編名作選

水の景色

歸

鄉

私の父は自動車事故で死んだ。崖からの転落である。大正十年で、自動車そのものの普及率も低いし、しかもいなか町での事故だから、きわめてめずらしいできごとといわねばならなかった。死ぬ運命にあった、というほかはない。

そのときの自動車は、上部が幌で覆われていて、自動車は転落した時さかさまになり、父は心臓の真上を、幌越しに、河原の大石にぶっつけて、その打撲で即死している。心臓の真上に一銭銅貨大の痣^{あざ}があり、たったそれだけの衝撃で生命を落としたのである。遺体の肌に残っているその打身の痕をみた時の、当時満四歳の私の記憶は、いまでも昨日の如くありありと身に残っている。棺に納められていた父の白衣の胸もとをめくって肌をみせてもらったのだが、私には、その別れをさせてくれたのが、母であったのか祖父であったのか、その記憶はない。母にはそのような気力はなかったろう。

その日、父は、孤野の祭礼に招かれて行き、夕食のあと、湯ノ山温泉に行くことにして、知人の旅館の主人ら三人と自動車に同乗したが、運転手が祭酒に酔っていたので、助手が運転した。

これが無免許で、三瀧川沿いの山道をのぼっているうち、運転を誤って川へ落ちたのである。三瀧川は川底に大石の散らばる川である。

父の遺体は、夜更けに、戸板にのせられてもどってきた。事故の知らせは、遺体の届くより先に到着していたはずだが、私には記憶はない。私の家は、丘陵地の蔭にある天台宗の寺院で、日が暮れると、椎の木の茂り合う参道のあたりは、梟くわうの声ばかりになる。その梟の声をききながら、父の帰宅を待っていたかすかな記憶はある。

満四歳という年齢は、まだ、死——というものの理解ができず、母の許へ裁縫を習いに来ている何人かの村の娘や嫁たちが、みな庫裡くらりに集まっていってくれる賑やかさが、私には嬉しかった、という記憶はある。死の意味のわからない私をあわがってくれる人たちに、甘えられるたのしさのあったことが、快さとして身に残っているのである。

父の死後、二年ほどして、私と母と、父の死後に生まれた妹の三人は、寺をすてて大阪へ出て、爾後じごは大阪、東京の各所を転々と流れ歩いたので、私も、郷里へもどったことがない。現役兵として軍務につくことになった時、父の墓参のため帰郷したが、その時はじめて三瀧川の父の転落死した、三ノ瀬という場所へも赴いたのである。

生家の寺のごく近くの農家に、おてつ婆さんという人がいて、当時もう七十に近かったが、この人が、なにかあるとよく家へ手伝いにきてくれていた。ことに父の死後は、母の慰め役になってくれ、母は、この人にだけは、どのような愚痴もこぼせたようである。もっとも信頼できる身近な人だった。このおてつ婆さんが、私の妹の生まれたあとは、その世話も手伝ってくれていたし、また、私を自分の孫のように可愛がってくれて、ほかに遊びにゆくところもない私は、母に

弁当をこしらえてもらっては、毎日のようにおてつ婆さんの家に行って遊んだ。一緒に裏山にのぼったり、連れ立って近所の寺へお詣りに行ったりした。このおてつ婆さんのおかげで、父亡きあとの私たちの家庭が、どれほど潤っていたかわからない。

三ノ瀬へ、私を案内してくれたのは、このおてつ婆さんの娘の嫁ぎ先の源さんという人である。伊勢川島の駅の近くに家があり、おてつ婆さんもこの頃は、娘を頼ってこの家に起居していた。源さんは大工仕事をしていた。源さんは、庭に咲いていた山百合の花を何本か摘んで花束をこしらえてくれ、それを持って出かけたのである。私はついでに湯ノ山温泉に一拍して、そのあと紀州を廻って帰京することになっていた。すでに日中戦争がはじまって、行先どうなるかわからぬ軍務につくことになるからである。青春の記念の旅であった。源さんと連れ立って家を出る時、おてつ婆さんは私に、伊勢訛りのとしより言葉で、

「三ノ瀬じゃぞ、よう覚えときなされや。おまはんのお父つつあまの亡くなられた、だいじな場所じゃでな。ようく、その眼でみて、拝んで来なされや」

と、いった。ゆっくりと、いいきかせる調子の、話す、というよりは、リズムカルに歌っているような口ぶりである。子供のころ、私が行くと、きまって、

「よう来たな。ほんによう来たぞな。さあさあ、はよあがんなされ」

といってくれた、その時のままの口ぶりである。ただ、ずっと年老いてはいたが。

三ノ瀬というのは、湯ノ山の駅を降りて、御在所ヶ岳の麓をうねうねと、二十分ほどもののぼって行った場所である。眼下に、岩石の間を縫って清流が飛沫^{しぶき}をあげている。源さんは、私に、

「ここじゃ、ばんさん。自動車が、まっさかさまになってのう」

といって、流れの一点をゆびさしてくれている。別に、眼もくらむ高さ、というほどの崖ではない。事故死するのがふしぎに思えるほどの、崖の高さでしかないのだが、もののはずみというものだったのだろう。切り立った崖の上の、古びた松に手を支えて、私はしばし清流をみつめてから、山百合の花束を投げ入れた。水にもまれながら花はみるまに流れてゆく。父の死を思うに、しては、美しすぎる水の風景であり、さわやかに過ぎる潺湲である。三ノ瀬というのは、三ノ瀬の景勝という意味だが、せめてこうした眺めのよい場所で死んでもらえたことに、私は、わずかな慰めを覚えたものであった。

*

滿七年の軍務を終えて、上海から佐世保港に帰ってきた私は、母と妹の疎開先である伊勢川島の源さんの家を訪ねた。戦地にいる私と、内地にいる母との間では、もし何かあれば源さんの家に連絡すればわかる、という申し合わせができていた。

汽車を四日市の駅で下りた時、私は、町並が一望焼野ヶ原になっているのに胸を痛めたが、その焼野ヶ原の中心に、諏訪神社の石の鳥居だけが、崩れずに悲壮に立っているのが、奇妙に印象深かった。諏訪駅へ行って湯ノ山線に乗り換えたのだが、その途中、リュックを負うて帰ってきた私の姿をみかけると、すれ違う人たちがみな、駈け寄ってくるように近づいてきて「あんたは、嵐の方と違いまっか」と口々にきくのである。嵐部隊は、中国南方で戦っていると思うので、まだしばらくあとでないと帰国できないでしょう、私は東京に籍を移したので東京の部隊に所属し、上海からもどってきたのです、と、いちいち答えたが、答えながらやはり胸が痛んだ。南方

では死傷が多く出ているはずである。嵐というのは嵐兵団のことで、三重県では津の歩兵第三百十三聯隊が編制に入っている。

復員部隊のことは、毎日、新聞に記事として出るので、私が、源さんの家へ着いた時は、玄関先に出てきた源さんの細君のおしげさんも、待っていた、といわんばかりの表情で私を迎えてくれ、挨拶がすむなり、

「おっ母さまと、あんたさんのもどられるのももうじきじゃろういうて、毎日毎日噂しておりましたがな。そりやまア、ようご無事でももどりなされましたなア。みなさんお元気で待つとられます。ちょっと一服して行きなされ。案内しますきに」

そういつて、私を迎え入れて労をねぎらってくれる。おしげさん夫婦には息子がひとりいるのだが、名古屋に勤めがあるので、家にはおしげさんと源さんと、おてつ婆さんしかいなかった。私が、何よりも先におてつ婆さんの安否をきくと、

「婆さまもな、あんたさんがいつもどって来なさるやろ、それまでは死ねんなあと、毎日いうとりましたわ。会うてやつとくんはなれ。もつとも、もう眼もみえんし、ただ寝とるだけですがな。耳も遠うなっておりますしな」

と、おしげさんはいう。年をきくと、おてつ婆さんはもう九十三になるといふ。

おてつ婆さんは、奥の座敷に、ひっそりと置物のように寝かされていたが、おしげさんが、
「ばあさんや、お前の待つとったお人かもどりなされたぞな。阿弥陀さんをよう拜んどったで、こないにして無事にもどられたぞな。ありがたいことじゃな」

と、耳もとでいうと、婆さんは、皺だらけの顔をにこにこゆがめて、数珠でもまさぐるよう

にして私の手をとると、

「ようぶじでござったなア。あみださんとお父つアまがまもつてくだされたのじゃ。ありがたいものじゃな」

と、感をこめていったあとは、ナンマンダブをくり返している。昔から念仏ばかりをとなくてきた人である。もう半ばはこの世を離れかけている、静かな老い方である。そのお婆さんの手を握ってやっていると私は、軍務に向けて発つ前に三ノ瀬を訪ねた折、お婆さんと会った時のことを思い出した。あの時もひどく老人だったが、いまはさらに老人である。

「ほんに、よう、ぶじで帰っておくれじゃったな。このまえ、おまはんがみえたのは、たしか九年前の夏のころであつたな」

年月の記憶だけはふしぎによい。そういつて、ほっほっと、声のない笑いをうかべたあとに、つづける。

「わしもな。もう半分は死んだも同然じゃ。こうしてのう、あけてもくれても寝たきりじゃで、あみださまをおがむほかには、もうなんのたのしみもないわな。それでも、こうやって寝ながら、ああいまごろ、おまはんはどうしていなさるやると、しょっちゅう案じとつたぞな」

そして、ぶつぶつと、口のなかで、ナンマンダブをくり返す。

その老人の、ぼそぼそとした、ひとりごとめいた言葉をきいていると、この老人ひとりを喜ばせるためにも、とにかくこうして、生きてゐるさとの一角にたどりつけたことは、ありがたいことだったのだ、という気がしたのである。実際には、私自身の心の底には、悲愁感や虚脱感、生活への不安感などがつめ込まれてもいたのだが、いつとき、暗い思いは忘れる。